

## △新刊紹介▽

### 蘇えれ長崎唐人屋敷

——『長崎唐館図集成』の出版によせて——

藪 田 貫

長崎の出島は、訪れるごとにオランダ商館の町並みが復元されていて、観光客を惹き付けてやまない。近年、旧暦正月を祝う春節祭にあわせてランタン祭りを実施した新地の中華街も、若い人々で賑わっている。だがそれに続く唐人屋敷（唐館ともいう）の一面に、足を踏み入れる旅行者はほとんどいない。「館内町」の表示が生き、土神堂・天后堂・観音堂・福建会館といった関連施設が残っているにもかかわらず。

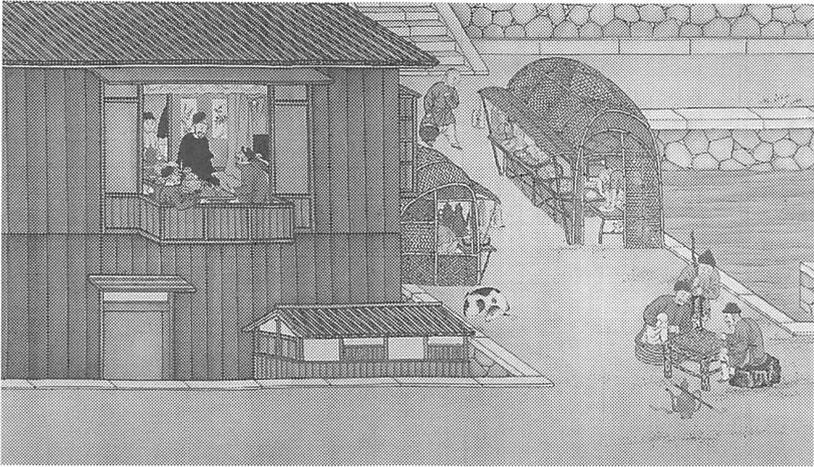
「出島」と指呼の間でありながら、「唐人屋敷」は忘れ去られてしまったのである。

私たちは、その唐人屋敷を描いた絵図・絵巻を共同で編集し、『長崎唐館図集成』として出版した。豊島屋版「唐人屋敷景」、石崎融思「唐館図絵巻」、狩野春湖「長崎図巻」、渡辺秀詮「長崎唐館交易図巻」、川原慶賀「唐館絵巻」をはじめとする秀作二九点が、国内外の所蔵機関の協力を得て収められている。サイズはA4、図版はすべてカラーである。長崎湾内に係留された唐船、土神堂の前で

はためく朱色の旗、唐人部屋の一階で日本人遊女と歌舞に興じる唐人、龍踊り（龍が宝珠を追いかけて踊り狂う正月十五日の祭事）や彩舟流し（模型の舟を燃やして、館内で亡くなった船乗りの靈魂を故郷に送る祭事）といった年中行事の場面場面が一四〇頁にわたり描かれ、頁をくついていると、まるで唐人屋敷を上空から覗き込んでいる気分になる。

成沢勝嗣（神戸市立博物館）の解説によれば、唐館図には二種類あり、第一定型は館内最奥部の竹林から始まり、唐人部屋・土神堂・二の門・伊万里店（伊万里焼や薪・野菜など中国人向けの日常雑貨を売る店）・大門へと続くコースを描く。それに対し第二定型は、天明四年（一七八四）の火災後に再建された館内の情景を、湾内の唐船から始まり、新地蔵・大門・二の門・唐人部屋・土神堂前の龍踊りへと、第一定型に逆行して展開する。さらに第二定型は長崎貿易の場面を新たに取り入れることで、貿易の視覚化を図っている。成沢の言葉を借りれば「隔離された中国」から「長崎における日中交流」への主題の転換である。唐館絵図によって館内の都市プランを検討した永井規男（関西大学工学部）は、天明火災後の館内に回路と自分建ての家屋・市店などが現出していることを捉えて「成熟した都市空間の出現」と評している。

こうして集大成された『唐館図』であるが、この試みには昨年十一月に急逝した大庭脩関西大学名誉教授（前皇學館大学学長・前近つ飛鳥博物館館長）の熱い思いがあった。それは「本来、蘭館図と唐館図は一体であるべきである」という信念であった。



唐館内本部屋の情景（二階の船主らと外でくつろぐ船員・市店）

長崎港の入口に人工島出島が出来たのは寛永十三年（一六三六）。はじめポルトガル人が収容され、十八年、国外追放となったポルトガル人に代わって平戸からオランダ商館が移転してきた。以後、出島といえばオランダ商館となる。扇を広げた形の島の面積は三、九六九坪余、そこにカピタン部屋、船頭部屋などの居住施設、乙名（おとな、長崎町中の乙名、市政責任者から選ばれた）・通詞（通訳官）部屋などの管理施設と大小の倉庫が建ち並んでいた。通常、在留オランダ人は十数名とされている。

一方、唐館は元禄二年（二六八九）、長崎村十善寺郷に開設され、敷地八、〇一五坪、のちに九、三七二坪に拡張された。出島の二倍強の大きさである。当初、長方形の囲郭のなかに二階建の唐人長屋が十九棟、本部屋数五〇があり、収容中国人は四八〇〇人を数えた。その後、新井白石の提議にかかる正徳新例（二七〇五年）による貿易抑制策によって、来航唐船は三〇艘（オランダ船は二艘）と定められ、在留中国人の数も減り、天明四年（一七八四）大火時の人員は八九二人である。

橋で市街と繋がっていた出島と違い、唐館には大門と二の門があり、市街地との往来をチェックした。大門と二の門の間には乙名部屋・通事部屋の管理施設があり、また伊万里店や日常雑貨を売る露店が立ち、鑑札を持った日本人商人が出入した。二の門から奥には遊女のみが入ることを許されたが、そこには唐人部屋が建ち並び、さらに土神堂（中国人船員たちの土地神を祀る）・天后堂（船神媽祖を祀る）・観音堂（観音菩薩を祀る）といった宗教施設があっ

た。また隣接した海岸部に新地が築かれ、蔵が造成され（新地藏と呼ばれた）、貿易品の倉庫として使われた。

ところで唐館・蘭館に対する絵図の作成は、元禄十二年（一六九九）、長崎を訪れた幕府勘定頭萩原重秀の命により、唐絵目利兼御用絵師渡辺秀石に描かさせたのを始まりとするという。この時、唐館図の第一型が生まれているが、萩原は唐人屋敷と出島双方の絵図、すなわち「唐蘭館図」作成を命じている。

以後、長崎絵として有名な豊島屋版「唐人屋敷景」も「出嶋和蘭屋敷景」とペア。石崎融思・高川文釜・川原慶賀らの描いた作品も「唐蘭館絵巻」と両者のペアなら、「長崎所役場絵図」も両者をペアで扱っている。円山応挙作と伝える「長崎港之図」も、画面に出島と新地藏・唐館を並べて描いている。大庭が「本来、蘭館図と唐館図は一体であるべきである」と繰り返す信念は、これらの事実に基づいている。

それにもかかわらず、だれがいつ、その本来のペアを壊し、「出島蘭館図」だけを取り上げ、「唐館図」を捨てて、今日まで省みなかったのか？

ここには開港後の唐館・蘭館の行方という、日本の近現代史が横たわっている。

安政五年（一八五八）の日蘭通商修好条約締結後、居留地と指定された出島に対し、私貿易の拠点であった唐館は民間に払い下げられ、開発に任された。今日見る、民家の楯比する景観の始まりである。一方、出島も明治後期に港湾改良工事の影響を受け、明治三七

年（一九〇四）周囲を埋め立てられたが、大正十一年（一九二二）、国の史跡と指定された。戦後は昭和二六年に長崎市が史跡内の土地三〇〇坪を購入し、二九年、庭園の復元工事が始まっている。この間、日蘭関係は二七年六月に国交が回復されたものの、旧蘭領インドに住んでいたオランダ人十一万人余に対する抑留補償が解決をみるのは三一年である。二九年の復元工事がいかに素早い対応であるかが知れる。

さらに五三年、長崎市に出島史跡整備審議会が設置され、符節を合わせるように六二年、『出島図』が出版された。一三六点の図版を収め、出島資料の集大成ともいべき大作であるが、この『出島図』は唐館図をすべて捨象した。あたかも江戸期の長崎には出島しかないかのように。この時、「唐蘭館図」のペアが最終的に解体されたのである。

大庭先生の発意は、この事態を受けたものである。なんとかして見捨てられた唐館図を集大成しようとみずから資料を集め、平成五年「唐人屋敷の復元的研究」班を関西大学東西学術研究所内に設置した。それから一〇年、待望の『長崎唐館図集成』として実現することとなったのである。収集された二九点の絵巻・絵図は、長崎市立博物館・長崎県立美術博物館・長崎県立図書館・松浦史料博物館・水府明徳会・神戸市立博物館・東大史料編纂所・京都大学図書館・ピーボディ・エセックス博物館など、国内外の十三機関・一個人に及んでいる。それぞれに詳細な解説が、日本語と英語で付けられている。

前半の図版をうけ、後半にはメンバー四人による論説が収められている。

大庭 脩 長崎唐館の建設と江戸時代の日中関係

成沢勝嗣 唐人屋敷逍遙―唐館図の変遷と展開―

永井規男 唐人屋敷―町の構成―

藪田 貫 唐館の内と外―「唐人番日記」について―

大庭先生は絶筆を残して他界されたが、本書は日中交流史に生涯をかけた先生の執念ともいえるだろう。幸い地元長崎でも近年、唐人屋敷の顕化事業が始まっている。長年におよぶオランダ偏重から脱却し、長崎での日中交流の歴史が回復され、唐人屋敷の記憶が蘇えりつつある。本書がそれに寄与できれば、私たちの望外の喜びである。

(A4版、解説・論説を含めて二四二頁、関西大学出版部発行、価格一三、五〇〇円)

(関西大学教授